海外の緑化事情　ニューヨークの緑化事情

ニューヨークは幾つかの島で成り立っている都市で、狭い土地にびっしりと高層ビルが建ち並んでいます。かつては「ニューヨークで一番の贅沢はなにか？」という設問の答えは、自宅で直射日光を浴びること。

つまり密集しすぎで、日の当たらない場所ばかりで、日の当たる場所にすむことは、お金持ちだというイメージだったようです。

その為に、古い建物がありません。ビルが密集した要因もここにあるかもしれません。

NYCのシンボルとしてそして、映画のロケ地としても有名な、エンパイアステートビルは1931年に竣工しています。87年前！その時代に世界一の高さを誇る技術もそうですが、建築できる地盤があったと言う事も重要な要素では無いかと思います。

こういった背景のため、下水事情は旧式の合流式の下水が大半だそうです。つまり、雨が降ると下水道に流れ込んで、通常の下水と一緒になって処理場へ。

ですので、豪雨がくれば、あふれてしまいます。あふれる＝逆流ですので、下水が街中にあふれることになるのです。

これはニューヨークに限ったことではありません。上物の建築が最も優先された都市部の負の遺産かもしれません。

そこで、雨水を緑化地帯へ集めて、一度に大量に下水に流れ込まないよう、グリーンインフラ計画を2010年から行っています。

計画としては2030年までに水を吸い込まない舗装地帯の10%の面積を緑化するものだそうです。その為の方法として、助成金制度をはじめ、新しい緑化への研究などもあわせて進められています。

このように、ニューヨークの緑化の第一目的は、雨水の管理のために整備されてきたものになります。そのほか、二次的には、ヒートアイランド現象の緩和や、二酸化炭素の低減。

以前ご紹介した、シンガポールのように、街の質の向上、そしてにより、緑化事業に携わる人の雇用創出など、もからみあった壮大な計画です。

結果としては、現在は機械的に行われている雨水管理の費用がさがり、緑が増えて不動産価値の向上も見込まれています。

大日新聞に関するお問い合わせ・ご意見などはホームページ及び
大日化成株式会社 06-6909-6755 までお願いいたします。

スタッフ紹介

日頃は営業活動やお電話で応対させていただいておりますスタッフの日常をお伝えいたします。

いつもお世話になっております。技術部の赤堀と申します。入社致しまして今年で23年目になります。入社は製造部に所属し製品の製造・出荷業務をしておりましたが、現在は技術部で、製品の検査や新製品の開発をしております。技術部のある岡山工場は、岡山県の北部に位置し、隣には、P2の稲葉浩志さんの出身地でも有名な津山市が有ります。

工場のある勝央町は金太郎まつり・金時太鼓など、坂田金時終焉の地として有名（？）な町で、金時まつり・金時太鼓にちなんだ物も多く有ったりと、とても自然豊かな場所で毎日仕事をしています。

私生活では、入社してから生まれた長男は21歳、次男は19歳になりました。2人とも小学校からサッカーをやっていて、昨年次男が高校を卒業するまで、休日のほとんどは応援のために地元での試合はもちろん、遠征試合で中四国を始め兵庫、大阪までサッカー観戦に出かけていました。卒業から休日のサッカー観戦に出かけていました。

戦が無くなって少し寂しくもありますが、代わりに夫婦で出かける事が多くなり先日は二人で献血に出かけました。ごく一般的なA型の2人ですが、冬場は献血をする人が減る時期なので献血ルームの方に大変感謝されました。

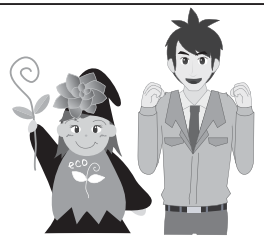
技術部　赤堀　巧

妻は丁度30回目の献血だったので、ガラス製の器を記念品としていただきました。ちなみに、献血は16歳から69歳までできます。様々な献血方式があり延べ回数だけで言えば男性では1260回の献血が可能なのです。まだ13回の自分としては、まずは20回を目標にしたいと思います。

前回は長男に声をかけて親子で献血に行きました。妻は高校生の時に学校に献血車が来たのがキッカケで、自分は妻に誘われて、長男は親に、そして友人を・・・さなキッカケかも知れませんが、こうして献血の輪や、善意の輪が広がれば。と思いました。

最後になりましたが、いつも大日化成の製品を使っていただき有難うございます。なかなかお客様と接する機会が有りませんが、ご意見・ご感想、気になる事がございましたら何でもご相談下さい、お客様の声を製品の改善・開発のキッカケに出来れば幸いです。

DAINICHI CHEMICAL CO.,LTD.
●本社
〒571-0030　大阪府門真市末広町 8-13
TEL：06-6909-6755(代)　/　FAX：06-6909-6702
●東京支店
〒105-0012　東京都港区芝大門 1-4-14 芝栄太楼ビル 5F
TEL：03-3436-3801(代)　/　FAX：03-3436-3803



次号もお楽しみに

URL：http://www.dainichikasei.co.jp

Vol.40

映画で学ぶ環境問題

A.I.（エー・アイ）
原　題：Artificial Intelligence
監　督：スティーヴン・スピルバーグ
製　作：スティーヴン・スピルバーグ
　　キャスリーン・ケネディ
　　ボニー・カーティス
出演者：ハーレイ・ジョエル・オスメント
　　ジュード・ロウ
　　フランセス・オコナー
上　映：146 分
公　開：2001 年 6 月 30 日（日本）
製作国：アメリカ合衆国

今回ご紹介する作品は、スティーブン・スピルバーグ監督の「A.I.」。今でこそ、「人工知能」と理解できますが、公開時には、まだなじみがないため「ロボット映画」と紹介されました。原作は1970年代に書かれたSF小説で、「2001年宇宙の旅」でも有名なスタンリー・キューブリック監督が、長年企画をあたため、映画化をめざしていたのですが、彼の急死後、スピルバーグが意志をつぎ、監督だけでなく脚本までこなして完成させました。

「技術が進歩した未来のある日、ヘンリーとモニカ夫妻の元に「息子」としてやってきたロボットの少年デイビッド。高度に開発されたロボットの中には、人間と見分けがつかないものも多い中、11才のデイビッドには、他のロボットとまったく違う点がありました。それは「子供が親を愛する感情」をもつようインプットされたこと。当初は人間ではない彼にとまどっていたモニカも、やがて実の母のようにデイビッドを可愛いがるようになります。そうして、大好きな母から愛される時間は、デイビッドにとって何物にも代えがたい至福のひとときになったのです。

ところが、不治の病で冷凍睡眠していた実の息子マーティンが、奇跡的に健康を取り戻して家に帰ってきたことから状況が一変。疑うことを知らず、純粋かつ誠実にプログラムされたデイビッドと違い、実に「人間くさい」マーティンは、ロボットの兄弟を邪魔に感じ、意地悪をし続けます。その結果、アクシデントによりマーティンがプールで溺れる事件が発生！

デイビッドがマーティンに危害を与えると誤解したモニカとヘンリーは、これ以上の被害を恐れ「ロボット」を捨てる決意をします。一抹の母心から、せめて不要品として廃棄処分にされないよう、デイビッドを森に置き去りにするモニカ。

そんなモニカを限りなく愛するデイビッドは、自分が人間にさえなれば母から愛してもらえるのだと信じて、昔読んでもらったピノキオの話を思いだし、ブルー・フェアリーと呼ばれる天使を探すため、長くつらい旅に出ます。」

ストーリーだけ書くと味気なく感じる話ですが、デイビッドを演じるハーレイ・ジョエル・オスメントが、天才子役の名の通り、ただ一筋に母から愛されたいだけの少年を見事に演じて涙を誘います。また、ジゴロ・ロボットを演じるジュード・ロウのロボット演技も素晴らしく、スピルバーグの演出も、人間の残酷さを救いがないエンタテインメントとして描いてみせます。

さて、70年代に書かれた原作にもかかわらず、キューブリックやスピルバーグの創作力も加わり、今、鑑賞しても十分見応えのある映画ですが、そもそもの設定が、地球温暖化による海面上昇の未来で、世界中ほとんどの都市が海に沈み、陸地面積の減少による農作物など食料・資源の確保が困難になったことから、妊娠に許可制度が設けられたことや、社会の担い手として「食糧が不要な」ロボット開発が進められたという背景があります。

現実には、資源不足や海面上昇よりも「人手不足」からロボット導入が進められている日本ですが、世界的に見れば、海面上昇だけでなく、陸地の荒地化や水不足問題は勢いを増し、どう考えても今後の食糧不足は避けられない状況です。

実際に、この映画だけは号泣せずにいられないというファンは未だに多く、とても切ないエンディングとともに、多くの人の心を揺さぶります。

4-5億年も前から、小説や映画企画としても警鐘されていた「地球の温暖化」。

にも関わらず、人工知能を開発できるほど優秀なはずの人間は、速やかな対策を取れるどころか、事態を悪化させるほど、目先の経済欲にまみれてしまっているというのが現実なのでしょうか。

この映画のエンディングに、人類は出てきません。なぜなら愚かな人類は、すでに滅びてしまったから。

今、現実を生きる私たちは、この映画の結末通りの道を歩んでいるのでしょうか。

それとも、叡智を結集させて子々孫々、人類を存続させることができるのでしょうか。

地球温暖化の真偽は別として、明らかに気象変動や地球環境は悪化しているのが実態ですから、何としても、このまま青い地球を守りたいものです。

そのようなことも考えながら、今からの時代こそ、何度も繰り返し観て頂きたい大人向けの作品です。